様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３６８

研究課題名（和文）アルベール・カミュ『手帖』－オリジナル原稿の復元と新しいカミュ像の探究

研究課題名（英文）Albert Camus's "Notebooks" - an attempt to restore the original manuscripts and to search for a new image of Camus

研究代表者
高塚　浩由樹（Takatsuka, Hiroyuki）

日本大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：９０２９７７７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：カミュの『手帖』は、従来、彼の人生と作品の「客観的資料」とみなされてきた。だが、『手帖』は作家の突然の事故死によって中断された状態で出版されたものではない。カミュは生前に修正を加えていたのである。本研究では、将来的に『手帖』全体の「校訂版」を作成し、修正前の『手帖』を「真の客観的資料」として甦らせることを目指しつつ、『手帖』の全9冊のノートのうち最も修正が多い第1・第7ノートを調査した。自筆稿にない多くのメモの挿入が判明した第7ノートに関しては更なる調査が必要だが、3年にわたる調査は、2つのノートにおける主たる修正の内容や、『追放と王国』・『最初の人間』の生成過程に関する論文として結実した。

研究成果の概要（英文）：Albert Camus's "Notebooks" were for a long time considered a primary, and, in a way, ‘objective’ source for insight into the writer's life and works. They were never published during his lifetime, seemingly left intact by his sudden death in a car accident in 1960. Yet Camus had typescripts of his "Notebooks" or "Cahiers" as he called them, and did revise and refine them. The focus of my study has been the manuscripts and typescripts of "Cahier I" and "Cahier VII", which are the most revised of the nine "Cahiers", in order to issue, in the near future, the critical edition of Camus's "Notebooks", which should shine a renewed light on his life and art.
As a result of my investigations over three years at Bibliotheque Mejanes, city library of Aix-en-Provence, I have published a series of papers on Camus's revisions to the "Notebooks" as well as on the development of "Exile and the Kingdom", a 1957 collection of short stories, and the posthumously published novel "The First Man".

研究分野：フランス文学

キーワード：カミュ　手帖　草稿研究　生成研究　最初の人間　追放と王国　カルネ　カイエ

１．研究開始当初の背景

(1) 近年、アルベール・カミュ（1913～60）の再評価が続いている。1952 年、サルトルとの論争において、彼の思想はその有効性を批判され、カミュは長い間「敗者」の烙印を押されてきた。だが、今日、彼の思想の根底にある「反全体主義」や「反テロリズム」が評価されるのみならず、文学作品もよく読まれ、日本においても、東日本大震災を機にカミュの小説（特に『ペスト』）が再読された。遺稿の自伝的小説『最初の人間』が 2011 年に映画化され、カミュの伝記的研究への関心も高まった。生誕 100 周年にあたる 2013 年には、大規模な国際シンポジウムが開催されたり、書簡集や研究書の出版が相次いだりするなど、カミュ研究はかつてない隆盛期を迎えている。

(2) しかし、カミュの『手帖』に関する研究は、他の作品に比べて進んでいない。『手帖』は、1935 年（21 歳）から 1960 年（46 歳）の交通事故死に至るまでの、カミュの「日記」兼「作業手帖」である。カミュの死後に出版された『手帖』は、従来、突然の事故死によって中断されたままの状態で出版された「客観的資料」とみなされ、彼の思想と芸術の変遷をめぐる研究は、まず何よりも『手帖』に依拠して行われてきた。しかし、出版された『手帖』には、本来の「日記」的な記述と、あとから書き加えられた「修正」が、区別されることなく入り混じっている。

(3) 『手帖』の原稿に生前のカミュが修正を加えていたという指摘は、ごく少数の研究者、たとえば、H. R.ロットマンや松本陽正らによって以前から行われていた。だが、2006 年および 2008 年に新たに刊行されたプレイアッド版カミュ全集のⅡ・Ⅳ巻に収録された『手帖』の注は、以前から刊行されていた 3 巻本の『手帖 I』（1962）・『手帖Ⅱ』（1964）・『手帖Ⅲ』（1989）の脚注をほぼ踏襲したものにすぎず、プレイアッド版カミュ全集の『手帖』は、期待されていた「校訂版」とはほど遠いものであった。2010 年、フランスのアンジェで開催されたシンポジウム「カミュの『手帖』を読む」は、『手帖』に焦点を絞った初めての国際シンポジウムであったが、『手帖』がカミュ本人による修正を経て出版されたものであるという指摘はどの発表者からも行われず、『手帖』を作家の人生と作品の「客観的資料」とみなす旧来の見方は少しも変更されなかった。

(4) 2013 年、カミュ生誕 100 周年を記念してフランスのスリジー・ラ・サルで国際シンポジウム「芸術家カミュ」が開催され、髙塚は、「『手帖』の修正と『最初の人間』の執筆 ―『手帖』第 1 ノートの冒頭部分における手直し」と題する発表を行った。9 冊のノートからなるカミュの『手帖』のうち、以前から修正に関する指摘のあった第 1 ノートだけでなく、第 7 ノートまでのタイプ原稿にカミュ本人が数多くの修正を加えていることを指摘し、『手帖』の資料的価値の再検討を訴えたこの発表は、シンポジウム参加者から高い評価を受けた。同時に、この発表に強い関心を示した各国の研究者たちから『手帖』の校訂版の作成を促された髙塚は、これまで行われたことのない、『手帖』の本格的な草稿研究に着手することとなった。

２．研究の目的

(1) 本研究は、将来的な目標として、9 冊のノートからなる『手帖』全体の校訂版を作成すること、そして「修正が施される前の『手帖』」を「真の客観的資料」として復元することを目指すものである。

(2) しかしながら、まずは『手帖』の第 1 ノートと第 7 ノートの 2 冊に研究の対象を絞り、3 年という期間での校訂版の作成を今回の研究の目標とした。というのも、フランスのエクサンプロヴァンス市立メジャーヌ図書館に保管されている『手帖』の原稿は、複写が禁止され、一度に閲覧できるページ数も限定され、原稿の精査には長い時間を要するからである。また、第 1 ノートは「共産党活動と、作家としての出発が重なる時期」に、そして第 7 ノートは「共産主義をめぐるサルトルらとの論争とその後の苦悩、さらに自伝的小説『最初の人間』の着想が続いた時期」に相当し、『手帖』の全 9 冊のノートの中でもとりわけ修正箇所が多く、カミュの政治思想と芸術の形成・変遷を再検証するために最も重要なのがこの 2 つのノートだからである。

(3) 『手帖』第 1・第 7 ノートのメモに加えられた修正の内容を吟味することと並んで、関連するメモがこの 2 つのノートに数多く残されている文学作品の生成のプロセスに関する「定説の再検討」を行うことも、本研究の目的の一つとした。第 1 ノートに関しては、出版された『手帖』では 1936 年の初めにそのプランが現れている、カミュの最初の長編小説『幸福な死』の生成過程を吟味する。また、第 7 ノートに関しては、1952 年に関連するメモが集中している短編小説集『追放と王国』（1957）、1953 年秋頃に具体的な構想が記されたが未完に終わった『最初の人間』を中心に、小説の着想から作品の構想が進展してゆく経緯を検討した。

(4) カミュが『手帖』を再読し、『手帖』のテクストに修正を加えた「時期」を確定するとともに、なぜカミュが『手帖』を再読し、どうしてそこに手直しを加えたのか、その「動機」や「意図」の解明も、本研究の目標とするところであった。

３．研究の方法

(1) フランスのエクサンプロヴァンス市立メジャーヌ図書館において、カミュの『手帖』を中心とした原稿の調査を行うとともに、パリ国立図書館において、『手帖』第 1・第 7 ノートで言及・引用されている書籍に関する調査を行った。

(2) 2014 年 9 月、パリ国立図書館において、『手帖』第 7 ノートで頻繁に言及されている

トルストイ関連書籍を閲覧した。それぞれの書籍について、カミュが読んだ版を確認しながら、『手帖』の記述の出典を確認した。また、エクサンプロヴァンス市立メジャーヌ図書館において、『手帖』第 1・第 7 ノートの原稿の調査を行った。特に、第 7 ノートの修正箇所の分析から、短編小説集『追放と王国』所収の、アルジェリアを舞台とする小品「客」のストーリーの源泉が、カミュが 1952 年に読んだトルストイ関連書籍のうちの 1 冊にあることを突きとめた。

(3) 2016 年 2〜3 月に、エクサンプロヴァンス市立メジャーヌ図書館において、特に『手帖』第 7 ノートの自筆稿と 2 種類のタイプ原稿の精査を行い、以下の 2 点を確認することができた。

まず、『手帖』第 7 ノートの 1953 年秋から 54 年 7 月にかけての記述に加えられた修正が、『最初の人間』の構想に関する複数のメモに集中しているということ。以前の調査で、第 1 ノートに加えられた修正の中にも『最初の人間』の執筆に関連するものがあることを確認しており、2 つのノートにおける修正が、いずれもカミュの遺作となった自伝的小説に関わっていたことがわかった。

次に、第 7 ノートの 1952 年の記述に加えられた修正が、『追放と王国』と密接に関連しているということ。第 7 ノートの自筆稿とタイプ原稿の詳細な比較を行うことによって、出版された『手帖』にある『追放と王国』に関連するメモのうち、少なからぬ記述が『手帖』の自筆稿には存在せず、タイプ原稿の作成の際、あるいは推敲の際に、あとから加えられたものであることが判明した。

(4) 2016 年 8〜9 月、まずパリ国立図書館において、カミュが『手帖』第 7 ノートで言及しているトルストイ関連書籍を改めて閲覧した。その後、エクサンプロヴァンス市立メジャーヌ図書館において、『手帖』第 7 ノートにおける『追放と王国』関連のメモを精査するとともに、『追放と王国』所収の短編「客」の草稿の段階的な進展を、「客」の数種類のタイプ原稿とそこに加えられている手書きの修正を吟味することによって確認した。

(5) 2017 年 2〜3 月、『手帖』第 7 ノートの自筆稿とタイプ原稿を、特に『追放と王国』と『最初の人間』に関連するメモを中心に、改めて精査した。第 7 ノートでは 1952 年の位置にある『追放と王国』関連メモの大半が、実は 1954 年のタイプ原稿作成時に新たに挿入されたメモであること、しかも、その種のメモにもカミュが手書きの修正を加えていることが確認できた。また、出版された『手帖』の第 7 ノートでは 1953 年の秋頃の位置に連続して登場している『最初の人間』関連のメモの中に、やはり第 7 ノートの自筆稿には存在せず、タイプ原稿を作成する際に新たに挿入されたメモが含まれていること、そして、出版された『手帖』の第 7 ノートで複数回登場している『最初の人間』という小説のタイトルが、第 7 ノートの自筆稿だけでなく推敲前のタイプ原稿でも 1 度も登場しておらず、いずれもカミュがタイプ原稿にあとから手書きで加えたものであることが判明した。

４．研究成果

(1) 3 年の研究期間を通じて、『手帖』の校訂版作成のための調査は、第 1 ノートに関してはほぼ終えることができた。一方、第 7 ノートに関しては、研究開始前に予想していなかった修正の複雑さと、その修正が内包する豊饒さが判明したため、校訂版作成のための原稿の精査になお時間を要する状況である。

(2) 『手帖』第 7 ノートに関しては、タイプ原稿の作成時に、自筆稿になかった断章がノートの複数箇所に挿入されていること、それゆえ、出版された『手帖』において、第 7 ノートのメモの順番は、メモの実際の執筆順を必ずしも反映していないことが判明した。この種の挿入と、挿入された断章にも加えられている修正が、第 7 ノートの校訂版の作成を難しいものにしている。しかし、同時に、この挿入と修正は、『追放と王国』と『最初の人間』という、当時のカミュにとっての「未来の作品」の真の生成プロセスを解明するカギでもある。なぜなら、メモの挿入と修正は、両作品に関して集中的に行われているからである。また、この挿入と修正の内実を精査することが、第 7 ノートにおけるメモの実際の執筆順の解明に直結する。

この一連の問題は、本研究を通じて浮き彫りになった新たな研究課題であり、2017〜2020 年度の「アルベール・カミュ研究 ―『手帖』の修正から作品の創造へ」（科研費、基盤研究(C)、課題番号：17K02603）において、継続的・発展的に研究を進めていく予定である。

(3) 『手帖』第 7 ノートには、トルストイに関連するメモが目立つ。トルストイを尊敬していたカミュは、自伝的小説『最初の人間』の構想に際して、トルストイの『戦争と平和』をそのモデルとして意識していたようである。第 7 ノートにトルストイ関連書籍の読書メモが目立つ中、第 7 ノートのタイプ原稿においてカミュが敢えて削除している一節が、1902 年にフランスで出版された『トルストイとドゥホボール教徒』という本からの引用の中に見つかった。それは、村長から頼まれて一晩預かることになった囚人を翌朝に解放してしまう善良なドゥホボール教徒の男、フョードル・ルベディエフに関する 19 世紀ロシアのエピソードである。この逸話こそが、1950 年代のアルジェリアを舞台とする、『追放と王国』所収の短編「客」のストーリーの源泉であることが判明した。本件に関しては、日本カミュ研究会において「「客」とトルストイ ― カミュ『手帖』から探る『追放と王国』の形成過程」と題した研究発表を行い、仏語論文 « La source "russe" de "L'Hôte" dans *L'Exil et le Royaume* »（*Etudes Camusiennes*, No.12 所収）を執筆して、2014 年 5 月に刊行され、従来、

現地人の囚人を憲兵が手荒く扱った 1934 年ないし 35 年のエピソードをヒントにした作品と言われてきた「客」の本当の源泉を示すことができた。

(4) 従来、短編小説集『追放と王国』の具体的プランが成立したのは 1952 年であり、自伝的小説『最初の人間』の着想と具体的プランの構築は 1953 年の秋頃に一気に行われたというのが、研究者間の定説であった。その根拠は、出版された『手帖』の第 7 ノート、つまり、第 7 ノートの決定稿にある両作品に関するプランやメモが、それぞれ 1952 年ないし 1953 年秋頃のメモの間に位置していることにあった。しかし、第 7 ノートの自筆稿とタイプ原稿を精査した結果、上述したとおり、第 7 ノートのタイプ原稿を作成する際に、第 7 ノートの自筆稿にはなかった両作品に関する断章が数多く挿入され、しかも、挿入された断章に、カミュがさらに修正を加えていることが明らかになった。

ロジェ・キヨの証言によれば、第 7 ノートのタイプ原稿は 1954 年に作成されている。第 7 ノートの決定稿に残された『追放と王国』と『最初の人間』の具体的なプランは、定説とは異なり、1954 年に作成されていたのである。そして、第 7 ノートの修正のステップは、両作品の構想の段階的進展と連動している。

本件に関しては、日本カミュ研究会において「『手帖』第 7 ノート ― その日付（dates）とクロノロジー」というタイトルで研究発表を行い、論文「アルベール・カミュ『手帖』第 7 ノート ― 決定稿までの 2 段階の修正」(『カミュ研究』第 13 号所収）を執筆し、2017 年 5 月に刊行された。

なお、『手帖』の第 1 ノートにおいても、実際には 1937 年に記された『幸福な死』のプランが、1936 年初めのメモの間に移動され、そのまま出版に至っている。出版された『手帖』において、『幸福な死』・『追放と王国』・『最初の人間』の構成をめぐるプランは、いずれもカミュが本当にプランをノートに記した時期に位置しているわけではないのである。

(5) なぜカミュは『手帖』を再読し、そこに修正を加えたのだろうか。その動機や意図に関しては、第 1 ノートの場合と第 7 ノートの場合を分けて考える必要があるだろう。

1952 年のサルトルとの論争における敗北の後、カミュは深い苦悩に陥った。特に 53 年末から 54 年 12 月にかけての 1 年間、カミュは長い執筆不能状態に苛まれた。彼が自筆稿とタイプ原稿を比べながら『手帖』を第 1 ノートから読み返したのは、ちょうどその頃である。カミュにとって、『手帖』の再読と推敲は、『手帖』を出版するための下準備であっただけでなく、自らの人生と作品を見つめ直す機会であり、第 1 ノートの修正は、過去を振り返り、自らの芸術の原点を再確認する作業となった。

一方、第 7 ノートに関しては、事情は異なっている。そのタイプ原稿の修正は、過去を振り返る作業というより、むしろ、新たな創造に向けて、作品の構想を進展させる試みであった。自筆稿にない断章のあとからの追加や、メモへの詳細な修正は、『追放と王国』と『最初の人間』という、当時のカミュが近い将来の完成を目指していた 2 作品をめぐって集中的に行われている。第 7 ノートを再読・修正するカミュの視線は、過去にではなく、新たな作品の創造に向けられていたのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 髙塚浩由樹,「アルベール・カミュ『手帖』第 7 ノート ― 決定稿までの 2 段階の修正」,『カミュ研究』第 13 号, 2017 年 5 月, pp. 13-37, 41-45, 査読有.

② Hiroyuki TAKATSUKA, « La source "russe" de "L'Hôte" dans *L'Exil et le Royaume* », *Etudes Camusiennes*, No.12, mai 2015, pp. 87-105, 査読有.

〔学会発表〕（計 2 件）

① 髙塚浩由樹,「『手帖』第 7 ノート ― その日付（dates）とクロノロジー」, 日本カミュ研究会第 63 回例会, 2016 年 12 月 24 日, キャンパスプラザ京都（京都府京都市）.

② 髙塚浩由樹,「「客」とトルストイ ― カミュ『手帖』から探る『追放と王国』の形成過程」, 日本カミュ研究会第 59 回例会, 2014 年 12 月 20 日, キャンパスプラザ京都（京都府京都市）.

〔図書〕（計 1 件）

① Hiroyuki TAKATSUKA, « De la correction des *Carnets* au *Premier Homme* » in *Camus l'artiste*, Presses Universitaires de Rennes, 2015, pp. 197-209.

６．研究組織

(1)研究代表者

髙塚浩由樹（Takatsuka, Hiroyuki）
日本大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：90297771